令和７年度学校評価表

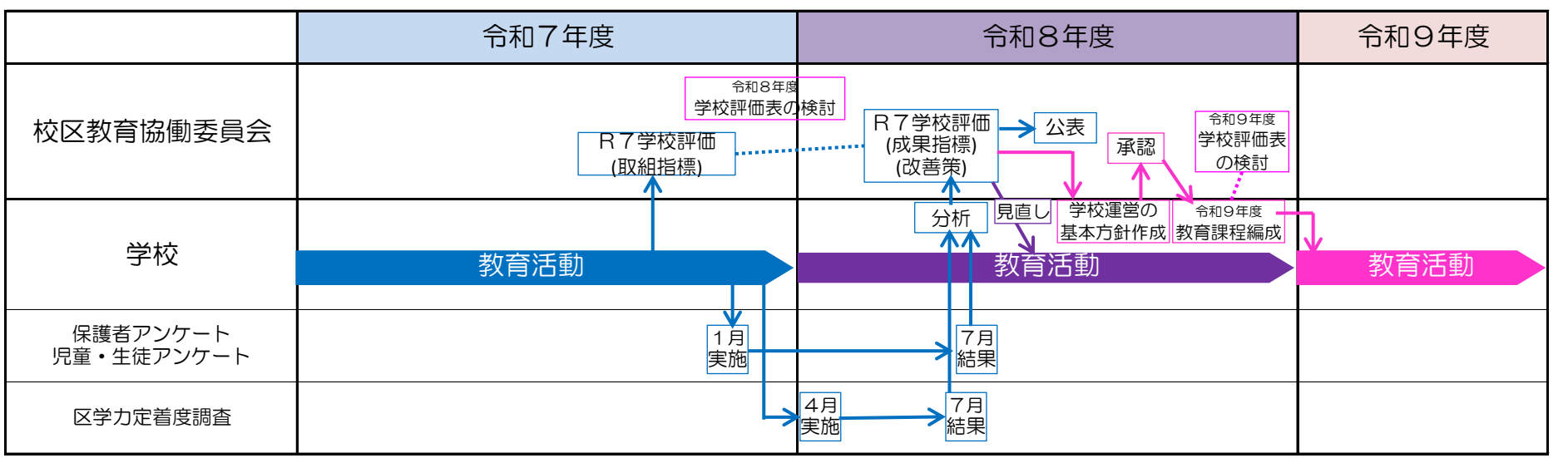
品川区立旗台小学校	校長	保土澤　尚教
旗台小学校校区教育協働委員会	委員長	小林　福太郎

校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱（改正　令和5年３月２４日 教育長決定 要綱第５号）に基づき、次に掲げる事項について、学校評価を行っています。

⑴ 学力に関すること。
⑵ 人間性や社会性に関すること。
⑶ 体力・健康に関すること。
⑷ いじめ防止の取組に関すること。
⑸ 特色ある教育活動に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。
学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度の教育課程の編成に生かしていきます。

学校評価の流れ（※令和７年度の学校評価が令和８年度および令和９年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



令和７年度　学校評価　品川区立旗台小学校

評価項目１　学力に関すること

重点目標		〇荏原第五中学校と中学校区の小学校との連携を通して、義務教育9年間の全教育活動を通して学力の定着と向上に努める。また、新たに品川区全体で取り組む内容について、本校の特色を生かして取り組む。 ・主体的・対話的で深い学びの実現 ・探究的な学びによる課題を見出す力の育成 ・基礎的・基本的な知識や技能の習得		
評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	児童対象学校評価アンケート調査で、「学習の進め方が分かり、やり方を自分で選んで振り返りながら学習した。」という項目の肯定率を50%以上にする。	児童の62%が肯定的な回答をし、自ら学ぶ方法を体験しながら学ぶことができている。	B	・学習の進め方については、児童の7割以上が肯定的な回答をすることができるよう、引き続き実践を重ねる。 ・AARサイクルは、次年度も授業づくりの視点として設定し、児童の主体性を引き続き引き出す。 ・探究的な学びは、今年度10時間以内の単元で試行した。次年度は、年間でテーマを設定して取り組む。
	各学年の授業でAARサイクル（見通し、選択、振り返り）を取り入れ、児童が主体的に学ぶ場面を日常的に設定する。	全学級の授業観察、及び研究授業等において、授業づくりの視点として設定し、特に若い教員が意識を高めて取り組んでいる。	A	
	荏原第五中学校区としての市民科一貫プランで、探究的な学習に取り組み、児童が体験的に学ぶ機会を増やす。	年間2回の打ち合わせ機会を生かし、次年度へ向けた探究的な学びの具体的な単元を構想することができた。	B	
②	品川区学力定着度調査で、各教科の平均正答率が区の平均を上回る。	区の平均正答率を上回った教科は、学年による差が大きい。理科については、全学年で区の平均を下回った。	B	・区平均正答率を超えることを目指すのではなく、各学年における学び残しを減らす取組（補習、家庭学習の工夫等）により、児童の確実な学力の定着を図る。 ・デジタルドリルの活用を進めたことで、効果的な取組と、デジタルだからこその課題も見えてきた。取組を先行した教員から全体への共有を図り、発達段階に応じた学びを展開する。
	デジタルドリルを授業や家庭学習で活用し、学習した内容を児童が定期的に振り返ることで定着を図る。	一斉一律に取り組む方法から、デジタルドリルやことのはノートなど、自分の学びに必要な方法を児童が選択できるようになってきた。	B	
	自分に適した学習方法・学習内容を選択して学習に取り組む児童を70%以上にする。	否定的な回答は34%だった。しかし、日常的には受け身の様子もまだ見られる。	B	

Ａ＝十分達成できた　Ｂ＝おおむね達成できた　Ｃ＝未達成

令和７年度　学校評価　品川区立旗台小学校

評価項目２　人間性や社会性に関すること

重点目標		〇すべての教育活動を通して、人として生きていくうえで必要な人間性や社会性に関わる知識や技術、技能を学び、様々な場面で実践できるようにさせることや、社会性や人間性、主体性を育成する。 ・市民科の学習において、学校・社会のルールやマナーに関する理解を深める。 ・挨拶など、児童の基本的な生活習慣を身に付ける。 ・学校行事やたてわり班活動を活用して児童の社会性、人間性の育成を図る。		
評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	ルールやマナーを守って、落ち着いた生活をする児童の割合を85%以上にする。	保護者アンケートで91%、教職員アンケートで100%の肯定率となった。しかし、日常生活上での課題は散見されるため、引き続き指導を行う。	B	・市民科学習を一つの柱として、学校教育全体で道徳教育を行うことができた。その一方で、より効果的な道徳的な学びの場を検証していく。 ・市民科学習の年間指導計画を見直し、ステップ4の実践の場をより明確に意識できるようにする。 ・次年度の校内研究は、今年度の道徳的な学びについても継続しつつ、教員個々のニーズに応じた校内研究となるよう工夫す
	市民科学習で集団生活におけるルールやマナーについての理解を深める。	教職員アンケートでは84%の肯定率となった。市民科を計画的に指導してきた成果がみられる。	B	
	校内研究で、道徳的内容の効果的な学習について教員が学び、授業の質を向上させる。	低・中・高学年での授業研究にとどまらず、協議会の方法も改善したことにより、教員が学ぶ場となった。	B	
②	すすんで挨拶をする児童を80%以上にする。	挨拶を自ら行う意識をもち、行動したと回答したのは、児童アンケートで84%となった。	B	・挨拶キャンペーン等の取組を、一過性のものとせず、日常に生かされることを目的とし、児童の自主参加も認める形態とする。 ・挨拶に代表される自主的な行動について、児童がより意識を高め、体験を重ねることができるよう、次年度もCSDAYの場を活用する。
	・挨拶運動の方法をCSDAYを通して見直す。 ・体験的な学習を通して挨拶が必要な場面を設定する。	CSDAYを独自に年2回実施し、取組方針と成果を報告した。	B	
③	学校行事やたてわり班活動等を通して、主体的に生活し、異年齢の関わりを生かすことができる児童を80%以上にする。	保護者アンケートでは98%の肯定率となり、異年齢での学びや遊びを肯定的に捉える結果となった。	B	・今年度は児童の学習経験を発達段階に応じて増やすことを目的に、異年齢での学びや関りを計画以外の場でも増やしてきた。次年度は、今年度の取組を計画に取り込み、一層の充実を図る。
	児童が楽しみ、力を発揮できる学校行事や取り組みを計画的に設ける。	行事等での児童の振り返りは肯定的なものがほとんどだが、より自己有用感を得られる計画性が必要でなる。	B	

A＝十分達成できた　B＝おおむね達成できた　C＝未達成

令和７年度　学校評価　品川区立旗台小学校

評価項目３　体力・健康に関すること

重点目標				
		○児童が生涯にわたって健康の保持・増進のための基本的な生活習慣を習得するために、日常的に運動に楽しんだり食について考えたりする活動を意図的・計画的に取り入れる。 ・TAを活用し、児童が安全に、楽しんで運動できるように年間計画を作成する。 ・健康についての知識を深め、基本的な生活習慣を身に付けさせる。 ・給食指導を計画的に行い、食に関する意識を高める。		
評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	前年度の体力調査の結果を全教員で周知し、すべての種目において都平均の下限5ポイント以内とする。	前年度結果を参考に体力向上を図った。下限5ポイント以内は達成したものの、体力向上へ向けた授業改善が必須である。	B	・OJTの場等を生かし、体育の実技研修等に取り組むことで、教員自らが体を動かす楽しさを実感できるようにする。 ・TAとの連携は日常的にできたものの、効果的な連携には不十分である。準備運動、主運動、整理運動等の連携を明確にする。
	体育授業においてTAの補助を効果的に活用し、体育の楽しさを味わわせ、児童の体育に対する意欲を向上させる。	TAとの連携は日常的、計画的に行うことができた。 運動の楽しさ、体育の楽しさを味わうための工夫を、他教科の学習にも生かす必要がある。	B	
②	安全で健康な生活を心掛ける児童の割合を85%以上にする。	教職員アンケートで85%の肯定率となったものの、「どちらかといえば…」がその多くを占めており、一層の工夫が必要である。	B	・安全で健康な生活は、学校生活の土台となるものであるが、日常的な指導を必要としている現状が見られる。 ・児童が自ら考え、自分や周囲の行動につなげていくためには、安全教育プログラムに基づいた安全指導の工夫が必要となる。全校放送の活用等、担任の指導に任せすぎない学校全体での指導を引き続き行う。
	養護教諭と連携し、健康指導、熱中症予防等の指導を充実させる。	プライベートゾーン、睡眠、熱中症予防に関する指導を計画的に実施することができ、事故の予防につながった。	B	
	水泳指導の着衣泳を行う際、外部機関と連携して専門的な指導を行う。	悪天候だったため、外部機関による着衣泳講座を全学年対象に実施し、水の事故の予防を図った。	B	
③	食育指導を通して児童が自ら健康的な生活を送る意識を70%以上にする。	児童アンケートでは、自ら意識を高めているという肯定率が64%にとどまった。さらなる工夫が必要である。	B	・食育による大人発信の取組は、様々な工夫を取り入れ、理解啓発を促してきた。一方で、子どもが学んだことをアウトプットし、全体へ発信するような場を設定する必要性を強く感じている。委員会活動等を工夫し、児童の効果的な活動を増やす。
	栄養士によるお昼の放送、給食通信、学校HPでの給食紹介を行い、児童と保護者へ理解啓発を行う。	お昼の放送や給食通信など、栄養士の様々な工夫により、理解啓発ができた。	A	

A＝十分達成できた　B＝おおむね達成できた　C＝未達成

令和７年度　学校評価　品川区立旗台小学校

評価項目４　いじめの防止の取組に関すること

重点目標		〇人権・安全・健康を教育活動の核として、「いじめ行為は絶対に許されない・許さない」、「いじめ行為は人間の関わりの中に必ず起こり得る」という二つの共通認識のもと、学校・保護者・地域が一体となっていじめ行為の未然防止、早期対応に全力を尽くす。 ・計画的、日常的にデジタルアンケートや面談等を行い、児童の相談に丁寧に応じる。 ・定期的に実施する「子どもを語る会」や、いじめ対策委員会において、組織的な情報共有と対応を行う。		
評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	各学年でのいじめ防止の取組について、ふれあい月間教員アンケートの全項目の肯定率を80パーセント以上にする。	全項目の肯定率が80%を超える結果となり、教職員の意識向上につながった。	A	・教職員、保護者、児童の理解啓発に成果がみられる一方、組織的に該当担任任せの意識もまだ残っている。教職員がいじめ対応を自分事として捉えられるよう、次年度も計画的な研修を継続して実施し、大人が学ぶ場を設定する。
	学期一回以上の研修と、保護者への周知、児童への理解啓発を継続して行う。	毎学期、生活指導主任と校長からの研修を実施した。また、保護者にいじめ防止の授業体験を実施し、取組の相互理解を図った。	A	
②	法令に則ったいじめ対応を確実に行い、本校のいじめ認知を実態に合う件数とする。	2月末現在で18件、今後の追加想定件数と合わせると20件のいじめ認知となった（昨年度比10倍超）。	B	・教職員から「仲がよい延長でのこと」「保護者はまだそこまで問題視していない」等の発言がまだ聞こえてくるため、いじめの早期認知が重大化を防ぐ最も効果的な対応であることを、引き続き指導を重ねる。
	いじめ対策委員会を定期・随時開催して、いじめ行為を予防し、早期対応を行う。	毎週の生活指導夕会、及び運営委員会での開催を定期開催したことで、学年でのケース共有が日常的なものとなっている。	B	
③	保護者や地域の理解啓発を行い、保護者アンケートの肯定率を70%以上とする。	保護者アンケートでは、92%の肯定率となり、学校や区の施策の理解につなげることができた。	A	・保護者や地域からは高い評価を得られたものの、我が子が当事者となった場合は保護者の対応も変わってくるのが当然である。学校での学びについて共通理解を図ることを続け、市民科地区公開講座や学校公開等の機会を捉え、授業の実際の様子を広く周知する。
	市民科地区公開講座の保護者懇談会でトリプルチェンジの模擬授業を行い、学校の取組を周知する。	実施した模擬授業が大変好評であり、終了後も様々なケースについて教員と保護者が意見交換をする姿が見られた。	A	
	学期に一回以上、学校いじめ対策基本方針の周知を学校便り等で行う。	学校便り、PTA通信等、学年便り等、学校からの発信の機会を捉え、周知を行うことができた。	A	

A＝十分達成できた　B＝おおむね達成できた　C＝未達成

令和７年度　学校評価　品川区立旗台小学校

公開

評価項目5　（特色ある教育活動に関すること）

重点目標	○心がつながる体験活動 ・縦割り班活動の充実 ・対話を生かした教育活動の推進

評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	縦割り班活動を充実させ、全学年の児童が異学年交流を行う場を増やす。	全学年で、年度当初計画されていた縦割り遊びに加えて、国語、理科、市民科、体育科等での交流学習を実施した。	A	・今年度実施した活動を、次年度の教育計画に取り込み、学習の成果を送り合う相手を明確にした、さらなる改善を図る。 ・次年度以降も、１～6学年で構成する縦割り班や、きょうだい学年やペア学年での様々な取組の実施可能性を試行する。
	全学年での縦割り班、きょうだい学年やペア学年での異学年交流活動に計画的に取り組み、異学年で関わりを生かした課題解決を図る。	1学期に実施した縦割り班遠足、縦割り班遊びをきっかけにして、異学年での課題解決学習に取り組むことができた。	A	
②	対話を生かした学習活動を日常的に取り入れ、教職員アンケートの肯定率70%を目指す。	教員の肯定率は92%と高かったが、日常的な対話活動には依然として課題がみられる。	B	・日常の授業改善として、児童に必要感のある対話の機会を設定することで、児童が相互に話し合うことで課題解決を図る素地を育成する。 ・今年度実施した活動を、次年度の教育計画に取り込み、学習の成果を送り合う相手を明確にした、さらなる教育活動の改善を図る。 ・次年度以降も、１～6学年で構成する縦割り班や、きょうだい学年やペア学年での様々な取組の実施可能性を試行し、系統的な学習機会を確保する。
	OJTを計画的に行う。教員のニーズに応じ、また教員相互のコミュニケーション機会となるよう、学期に複数回設定する。	年間計画に基づき、学期に複数回実施したが、その効果を高めるための方策が教員から提案されている。次年度に向けて再検討する。	B	
	各学年の発達段階に応じて、体験的な学習の機会を計画的に取り入れ、本物に学ぶ学習を行う。	2年生の地域学習、4年生の瓢箪づくり体験、5年生のドリームジョブ等、体験学習を教科と関連付けた指導を行った。	A	
	校協教のCSデイを年間2回自主開催し、児童や教職員が地域と共に教育活動を進める機会を設定する。	校協教の方々から意見をいただきながら、児童主体の活動を実施した。いただいた助言を次年度に生かす方向で検討する。	B	
③	児童の読書冊数を増やし、学校図書館を利用する児童を90%以上にして、読書活動を推進する。	授業も含めて、学校図書館を利用した児童は95%となった。さらなる読書活動の推進を図る。	B	・次年度の教育課程を見直し、朝読書を徹底するための時程の見直し、及び「学校まるごとライブラリー」と題した学校図書館の一層の充実を図る。 ・児童相互の読み聞かせや、ビブリオバトル等の活動も引き続き行う。
	各教科と連携し、児童の学習成果の発表の場としても学校図書館の三機能（読書センター、学習センター、情報センター）を生かす。	学校図書館の三機能を教職員が理解し、一層の取組充実を図る。	B	

A＝十分達成できた　B＝おおむね達成できた　C＝未達成